

直島への手紙 第六信

前略 大岸 様

展示が始まって、早いもので期間の半分か過ぎました。10月になり、直島もそろそろ祭りの季節でしょうか？

さて、今回は、私たちが直島の方に話をお聞きした時に、私がとても驚いた話でお手紙を書きます。その話は宮浦の人が葛島に伝馬船で渡って、米を作りに行っていたというお話です。現在は無人島になっている場所に農地があったという事に驚きました。それは、無意識のうちに、無人島という言葉だけで、「暮らすことができない」不便なところと思い込んでしまっていたことを気づかされたからです。島の暮らしについて少しお話をしたいと思います。

まず島の農地を調べるために、戦後すぐの頃の航空写真を見てみると、ため池や農地らしきものがあることが確認できました。それで早速、有志で渡船をチャーターして、直島の人たちとともに葛島、荒神島、家島、喜兵衛島、屏風島に行ってみました。現在はどこも藪で、藪漕ぎの連続でした。それを越えていくと、本当にため池があり、田んぼの跡があったのです。特に、驚いたのは荒神島の棚田です。棚田は海に面しているのですが、浅瀬に岩礁があり、渡船で渡るのも一苦労の場所でした。砂浜から一段高くなった場所に登ってみると、まさにそこに棚田があったのです。それは細い谷を田んぼにして、最高部と真ん中の高低差が著しくなる場所をため池としていました。田んぼの大きさを測り、試しに面積をもとに収穫量を計算してみると、ちょうど6人家族の一年分にあたることがわかりました。

さらに、瀬戸内海歴史民俗資料館に所蔵されている「三宅家文書」の絵図を見てみると、直島群島を描いた絵図に田んぼや畑が描かれていたのです。年代が分かるものとしては天明9年(1789)のものがありますので、江戸時代には、直島群島に田んぼや畑があったことが分かりました。

今回、実際に渡船で島に訪れたことで、直島群島の水田に

は、①谷筋に小水田を連ねるもの(棚田)と、②浜堤の後背地を利用したもの(湿田)という2つのかたちがあることもわかりました。瀬戸大橋の架橋の際に発掘調査を行った檀石島の大浦浜遺跡では、②の浜堤の背後から弥生時代前期の土器がまとまって出土しています。香川県では海沿いや島で、米作りが伝わった頃の集落の跡が見つかっています。米作りを直接的に示すものではありませんが、荒神島や葛島にも同じような地形がありますので、小規模で、断続的かもしれませんが、湧水を利用して稲作を行っていたかもしれません。

一方で、家島のように塩田による製塩業を主な生業として暮らしを営んでいた島でさえも、周辺で農作物の栽培や小規模な漁、それらの販売等を行っていたことを教えていただきました。

このように、島での暮らしは、①水を確保(湧水地点(水源地)の発見とその利用)し、②海と丘陵の間を住まいや生産の場として利用し、③さらに斜面などの周辺地も利用して多様な生業が組み合わさされていました。それは、日々の暮らしの中で、様々な挫折や工夫が繰り返されることでかたちづくられてきたのでしょう。

無人島の多くは、藪に包まれ、近寄りがたい場所になりつつありますが、無人島は何もない場所ではなく、島で暮らす知恵が密に残されている場所だったのです。環境を知りつくし、試行錯誤を重ね、暮らしを少しずつ豊かさにしてきた先人たちの姿が目に見えてきました。

島と言えば漁業や塩づくりが主な生業とイメージしていただのですが、今回、島の方々のお話しや遺跡、現地のフィールドワークを通じて、多くのことに気付くことができました。

まだまだ直島群島のことを調べてみたいと思いますので、お手紙書かせていただきます。

早々

四国村落遺跡研究会 渡邊 誠 拝



荒神島に残る棚田



荒神島に残るため池